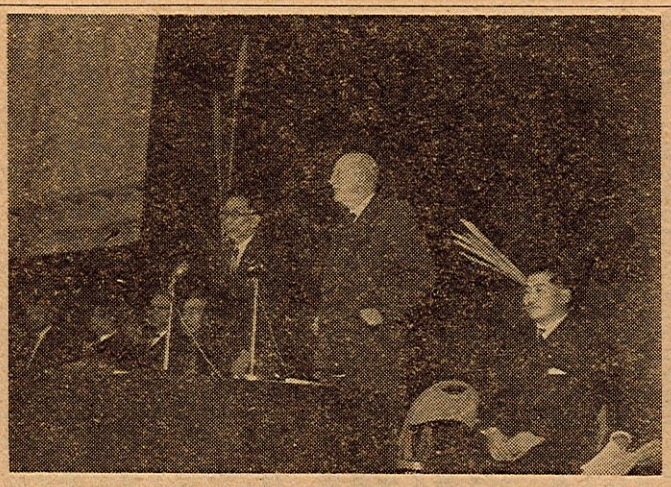
柏崎体育

発行所　柏崎体育団事務局
（柏崎市役所内）
発行編集人　今井哲夫
印刷人　柴野要三郎
定価一部　10円
（毎月1回10日発行）

スポーツと全人の教育
青少年生活に對する
スポーツの意義
カール・ディームの思想

ドイツ、ケルン体育大学々長、カール・ディーム博士は昭和三十年十月日本朝野の招聘で来日、国内十都市で講演を行つた。柏崎市には十月三十日来訪、一中体育館に於ける歓迎体育民踊大会に臨んだ後、市公会堂で、県内体育、教育関係者に二時間の講演を行ひ多大の感銘を与えた。ディーム博士は、プラトー、ペスタロッチ後の教育者、哲学者、体育者として高く評価されている。博士は又学者としてだけではなく、実践者として偉大な行績を挙げている。博士は過去幾回かのオリムピック大会ドイツ選手団長であり、故クーベルタン氏と共に近代オリンピックの父とも称せられ、過去のオリンピック大会の中で最も豪華盛大であつたベルリン大会は博士が創始した。又ドイツ国内に於いては各種のスポーツ、体育の組織、機関を創始し、幾多の諸制度も亦博士の創案、建議によつたもので、過去及び現在を通じ、ドイツ体育の最高指導者の地位は揺がない。敗戦後のドイツが、どうして今日見る素晴らしい体育、スポーツの国として、生き生きと建ち直つたか、ドイツの体育、スポーツが、ドイツの復興の力の泉として、どの様な役割を果たしたか、それだけではなく、もつと本質的に、それが人間と人間性に何を意味するものとして押し進められたか、これらの厳しい歎問に対して、博士はただ一人回答を与えることの出来る人である。博士の体育、スポーツに関する研究は、哲学教育、社会学、医学、心理学、考古学及び諸科学の広範な角度から進められ、これによつて、体育、スポーツには新しい領域がかつ然として開かれ、中世紀以来さげすまれていた肉体活動が新しい衣を着て登場する動機を作つたのである。博士の思想は広範且深奥、汲めども尽きぬものであるが、来日中の講演の中の示さに富むものに、今一度ふれてみたいと思う。（今井哲夫）



挨拶するデイーム博士

◆肉体と精神に関する二元論の克服

世に、頑健は原始野蛮時代に必要であつたが、文明時代には頭脳こそが尊重されなければならないとする風潮があるが、博士は別の見解を持つている。そして博士は最初に言う。

『野性の動物は、家畜よりも賢い。何故ならば、野性の動物は自由の中で自ら訓練するからだ』と。

久しい間、精神と肉体の二元論による人間形成論が思想界、教育界を支配していたが、今日、それは袋小路に行きづまつた。博士に従えば、それは当然の行きづまりであつた。博士はプラトーを継ぎ、人間形成を一元論により展開し、幾多の実証をもつて肉づけている。

我々は暫く博士の論述を聴こう。

『肉体を形成するものは精神である。しかし私に言わせるならば、肉体の形成が、実は、精神の形成なのである。あらゆる教育は、肉体の修練から始まる。そして、肉体の修練が、いわれるところの精神修練に、何の影響も与え得ない程弱くなると、そこで肉体の形成が終るのである。

プラトーは「音楽は決して心ためだけに奏でられるものではない。まだギムナステイク（広い意味での身体教育）は、単に肉体のためだけに行われるものではない。否、この二つは要するに共に心を養うために行われるものである。それ故に、神はギムナステイクと音楽を、分離されることのない教育の一体として人間に与えたのである。肉体形成と精神形成は分離されるものではない」と亦述べている。身体の修練は直接的な精神教育である。プラトーのいうところに従えば、身体の修練は、主に思考とつながつているものである又その逆に、思考が身体形成にもつながつているのである。激しく身体訓練を行うものは同時に精神的なものをもまた働かせているからである。

ルソーはプラトーをうけついで述べた。

「教え子に精神力を養わうと思うならば、精神力を支配するもろもろの力を養え！。就中、常に身体を鍛えよ！。身体を巧みで理智あるものにするために、頑強で健康なものに育てよ」

唯物史観の著者であるフリードリッヒ・アルフレッド・ランゲは、その著「身体訓練」の中で次のように記している。

「あらゆる身体訓練は、すなわち精神の訓練であるなぜならば、身体訓練は普遍性をもつからである。しかもそれは、他のどんな種類の普遍的な訓練よりも優れた意味をもつている。一方、無生物としての身体、いわば肉塊は、訓練に価しないものである。即ち我々の本質から言えば、一切の行為は専ら精神によるのである。我々の精神が、我々を訓練しているのである。ものを読むとき限で遂一文字を追つて、理解の中に一つの概念を作る場合もあろう。また、意思衝動を一つの方向に集め、それによつて筋肉活動を支配し、そこに巧みな跳躍を生み出す場合もあろう。どの場合も同様である。

このとき、身体訓練が、同時にそのまま精神訓練になると思い込むことは許されない。なぜならば、身体訓練の際、全体または空間的関係を把握して、その前提の下に、初めて個人個人の克己や服従がたまたま同時に訓練されるものだからである。だから寧ろ、目的をもつて行う肉体行為の全体そのものは、その底に動く精神的機能の光にてらして観察しなければならないのである」

この認識の中には、全人教育に対する信頼が根ざしている。このように肉体訓練は、全体としての人間の本質の中に直接影響をもちこむのであるが、その本質とは、プラトー以来、我々が考えてきている三つの形即ち、肉体（Körper）と精神（Geist）と心（Seele）で説明出来るのである。しかもこれを正しく観察するときに、これらの三つは分離することのない一つのものである。かくて二元論を克服することは、近代科学の基底にある願望なのである』。

文明開化は人間の素晴らしい頭脳に負うている。もつと間違いなく言うならば人間の素晴らしいはたらきに負うている。要するに人間の所産である。世の風潮は人間の理解に於いて肉体と精神を分離する誤ちを犯している。よし、完成された人間に於いて、肉体に影響されない頭脳があつたとしても、その頭脳、精神はプラトーに従えば、幼時と言うよりも母胎にあつた時から肉体の成育と相関々係にあつた。肉体をさげすんで、精神のみを尊重するものは、精神を軽視する肉体主義者と同じい誤りを犯している。要するに人間そのものを無視している。もつと緩やかに言えば、例外を普遍にみているのである。優れた精神活動というものは、精神活動をするために培われた肉体の健康を、肉体的にそんなに訓線しなくとも維持してくれることがある。精神の世界や、芸術の世界に働く八十代の人々が、とり立てて肉体訓練を行つていなくとも健康であるという事実が示している然し乍らデイーム博士によれば『それは恵れた例外で稀れなものである』

◆近代機械文明の中にある人間の危機

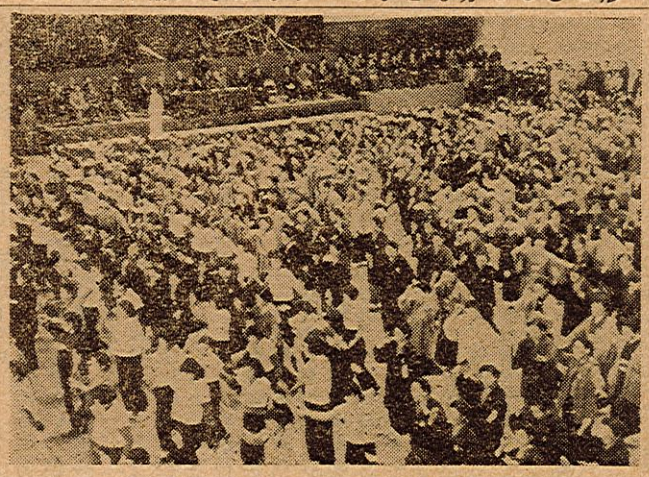
さて今一つの問題にふれよう。

原始野蛮の時代には自然と外敵の脅威に抵抗するために自らの身体訓練が必要であつたが、交通機関の進歩は、自然や外敵の脅威の減少した文明社会の今日は抵抗力を必要としない、と言う問題である。

この見解には一つの真理と多くの誤謬が含まれている。成る程原始野蛮の時代の脅威は減少した。然し乍ら文明時代の野蛮が別の性質と形をもつて現われていることである。文明のシンボルとも称せられる都会の中に、四角のジヤングルもあれば、都会のジヤングルもある。煤煙や汚濁のジヤングル、騒音と光彩のジヤングルは今や周知の事実である。人類の幸福のためにあるべき化学の進歩が、誤つた目的と人類の理想への道を踏みはづして、人類を滅亡に陥れようとする原始兵器を出現する現今が、何で野蛮でないと言われよう。より強い身体の健康性が要求され、理想を目指して働く、より健康な頭脳が要求されること、古今を通じ、今より強い時代はない。

再びデイーム博士の言うところに戻ろう。

『ドイツでは、少年少女の思春期が、今世紀の初頭に比べると、今日二年間早くなつていると認められている。又急速に進んでいるのは、異状な痩型の身長の発育である。十五才の年令期の身長は二十年前に較べて十二糎伸びている。このような不規則な痩型の身長の発育は、田舎よりも都市の方が甚しい。また都市も社会的に恵まれた家庭の子弟に見られるのである。この異状発育と関連して、罹病年令が早期にやつてきている事実が認められる。即ち、以前は青少年に見ることのできなかつた神経障害、心臓病、循環器疾患が彼らの中に増えてきたのである。



大踊民育体迎歓士博ムーデイ

博士は現今の危機の前に立つて、これに手当てを加えて、決定的な勝利をもたらすために、スポーツの意義を説き続ける。

スポーツ、遊戯とは何かそれは教育と如何なる関係に立つか。人間形成の上に如何なる役割を果すものであるか。どのような方法で行わるべきであるかを展開する。博士の論述はスポーツに対する讃美だけに終始しているのではなく、道を誤つたスポーツの惰落については激昂して論難する。スポーツや体育に関する対立や論争に対しては、全人形成の立場で和解の道を提与しているのである。

そして「重要なことは、肉体訓練が規則的な生活の習慣になること、そして運動への衝動をたわめずに、個人個人が、老年になるまで、その年令に要求される肉体的な最高能力を目標として、方向を誤らず訓練することである。これによつて、人は生活を新鮮なものとし、年寄ることを防ぎ、終生健康と行動力を保つことができるのである」としているのである。この結論は我々も熟知している平凡なものである。然し我々はこの平凡な結論に至る根拠や道程について、未熟な智識と抜術しか持ち合わしていない。我々は次号に、この点に関する博士の教えを求めよう。（次号に続く）

広告

カール・デイーム博士の教えを収録した左記書籍をお頒ちします。

柏崎市役所内、柏崎体育団事務局へお申込み下さい。

◎カール・デイーム著
「スポーツの本質
その教え」
昭和三十年十一月発行
定価　一七〇円
送料　一六円

◎全国都市体育研究協議会編集、発行
「立ち上るドイツ青少年
ーその足音と近代スポーツ思想ー」
昭和三十一年四月発行
定価　三五〇円
送料　四八円

一選手の記

――柏商水泳部優勝回顧にかえて――

三井田吉彌

〝人の善意と信頼の中に立つ〟……といえば、少し思いあがつた表現になるかもしれない。然しこれが僕のいつわらざる実感なのである。

過去においてもそうであつたように、現在もまた学校教育の営みの中で、一つの運動部を担当してゆくという、指導者の仕事はつねに若い世代の善意と、信頼の中におし進められている。

昭和二十三年、柏商水泳部が戦後最初の県下制覇を遂げた頃は、まだ各校において、競技者養成の訓練が十分にゆきとどいていない時代であつた。問題はその後の激しい角逐の中で、いかにして栄誉を純情なる自分の選手たちに味わせるかということであつた。けれどもこの七年間において他を抜いて出るということは、まことに至難な仕事であつた。文字通り苦闘の歳月であつたという感じがする。

ときおりきびしい水準の向上を眼のあたりにして、安易な諦観に逃避したこともあつた。然し勝負への執着は残らない。勝利追求への、身を削るほどの魂にはならないのである。しよせんはわが手でわが選手を鍛えてゆこうという身構えに寄りすがることになる。勝負の世界に自分を頼ろうとするこれ以外に術があるはずはないう自分の選手を育てること以外に道はないという、単純な悟りに到達するのは当然ではなかろうか。

かくして昭和三十年、僕たちは七年ぶりに佐渡勢をおさえて県下の覇を握つただそうしてインターハイ東北七県ブロック大会の優勝校となり得た。一つのチームの指導者として、静かに既往をふりかえるとき、そこに長い愛情の脈がよみがえつてくる。一つのチームに集つては、卒業していつた幾人かの悲願が、歳月とともに一つの流れとして続いてきていたことを、いまさらのようにしみじみと感じさせられるのである。

この年度シーズンの当初から意欲と計画が次々に実を結んでいつた。僕は自分の眼を疑うような記録の向上にさえ、ゆきあうことが出来た。なかでもその精進の深さ、その向上の速さをチームの内部に響き返してくれたのは、自由形の小林俊毅であつた。小児マヒという身体の悪条件を真実、小林個人としてでなく、柏商水泳部の一部員としての意識で克服してくれた。僕は彼の精進の過程で、自からに負けて感傷に落ちこむことを、鬼になつて避けようと努力した。そのきびしい鞭に彼はこたえてくれた。

東北大会々場、岩手県金田一プールの表彰台に立つ小林俊毅のほそい身体を眺めながら、大人気なく眼がしらを熱くした。このときだけは真実、感傷に身をまかせてしまつていた。不思議にも、小木の民踊を徹底的に御指南戴く御便宜をお願いしたい。

二、学校の当宿室に一泊させて戴きたい、但し食事は携帯するから絶対に御用意なきよう。

とお願いしてあつたが、教頭先生にはその何れも計らい兼ねるとの由である。そこで大久保教頭先生と池田先生の御両人に連れられて小木町役場を訪ね、金子観光係とお三人の計らいで五層楼の喜八屋旅館に案内されてしまつた。これはすつかり饗中の予算がくるつたぞ、と聊か不安であつたが、ここを撰んで呉れた理由は、当館の御主人が小木中学の教官であり、小波会の重鎮として民踊の名手であられるからとの親切心からである。

案内された室は、三階の海よりで、広い見張らし台の俯、小木港、内の澗、外の澗を一望で遥かに越後連山、日本アルプス、近くは米山、弥彦を望み見る絶景である。正に〽あかぬ眺めに遂乗りおくれ、次の船待つ小木港と云うところである。

附近には、矢島、経島を始め、御所桜、南仙峡その他多くの名所のある由で、何といつても風景は佐渡第一ということであるが、民踊勉強を第一に、観光には全く関心を向けない事として夕暮を迎えた。

〽小木の入江も静かに暮れて、泊り船から立つ煙。

大小幾艘かの船から炊煙を立てているのもある。新潟行きであらう白い客船も碇泊している。感慨が唯ひしひしと胸に迫る眺めである。

夜は、出張中の青木先生が帰町されて教頭先生と来訪下され、喜八屋の御主人事松井守之助先生並に小波会のナンバワン青柳辰雄氏と四人の指南で、八畳二間をぶつ通しにして猛烈な練習遂に深更一時になつてしまつた。

翌朝、更に宿の御主人には、わざ〳〵浴衣に笠を着けて模範を示され、仕上げの練習をやつて下さると云う、御厚意に衷心からの感謝を捧げて雨の中を出発、真野に向うのであつた。

ただでお習いした小木音頭は、相川音頭と同曲で踊るものであり、尚又小木おけさは、吾々が撰鉱節と聞いていた。佐渡おけさの崩しであると思われる節につけて踊るところに何か物足りなさを覚えさせられたのであつた。

紅林武夫氏を迎えて

月橋会

中部の教育研究会から体育研究会の講師として、紅林武男氏への交渉依頼があつたので、好機逸すべからずと、多忙の氏から無理して来てもらつた。

十一月廿四日朝到着、午前十一時から北条中学校で講演、実技指導、午後五時から、三橋体育研究所新潟県支部の会合を佐渡五旅館にて開催午後七時より、柏崎小学校において、講演会二十五日は午前中石地中学校、小学校でラジオ体操の指導、後第一中学校で、講演、実技指導という様なスケジュールで終つた。

紅林氏は柏崎とは深い関係のある人で已に五回か六回位指導に来ている。今回の来柏は、短時日なのと、幾つかの会場であつたため一会場の参会者としては、充分話を聞けなかつた点があり、御満足いただけなかつたと思う。しかし筆者は公用のため、一中に於ける研究会こそ失礼したが、他は殆んど全部、氏と行動を共にし、其の間色々と話合つたため、私自身としては得る所が多かつたことを喜んでいる。紅林氏が、今回の来柏に於て、主張した点で、我々の今後に大いに学ばねばならぬ点は、次の点であると思はれるので御参考に供したいと思う。言うまでもなくこれは、筆者の消化したものを申述べるのであつて、紅林氏の片言隻語そのまゝ記述するものではない。

何と言つても「体育とはみ、努力と経費が食われ、体育館と称する、美事なものに予算が計上されて、その中にある、身体修練の技術と保健強化の実際はどこかえ吹つ飛んでしまつたのである。言うなれば、所謂保持的健康が健康教育の名の下に熟を上げられた一面はあるが、健強教育は全然顧みられず、それは、遊具や、遊具というものを全然感じられない。僕は健康増進の手段として水泳を利用してみたがよい、という程度の立場にしかおいてやらなかつた彼を育負つた上級生もいた。そのなつかしい上級生たちの微笑が、あの金田一プール表彰台上の小林俊毅の姿に幻想となつてつきまとう錯覚が、僕の脳裡に生きている。僕は金田一プールの炎天のなかで、この幻想のためになら泣いてもいいではないかと、自身にいい聞かせながら立ちつくしていた。

かくてこの年の柏商水泳部の優勝は、僕の生涯の思い出を支配するであろう。それは勝利の酒の甘さのゆえではない。この一人の不具の少年を、水泳選手として育ててやれるような愛の芽を、自分の仕事の領域のうちに、もち得たという幸福あるがゆえである。

このささやかな幸福は、しかし日本競泳界の水準とはなんの関係もないことかもしれない。たゞ僕らの念願するアマチュアリズムの愛の実践として、一つの意味だけはもつと思うのであるが、これは狭量のなせる独語であろうか。

写真は紅林武夫氏（NHKラジオ体操指導者）

体操大会に日本代表として出席し、アジア、近東、アフリカを始め、世界各国の青少年の体育の実際を見聞して、日本の教育が如何に重大危機にいるか、世界各国は学校教育の中にある体育は勿論、体育そのものをどの様に考えているかという、具体的事実を直視して重大なる警告を日本教育界に与えねばならぬと説いている。即ち体育は、アメリカ的教育のアクセサリー主義でなく、単なる知、徳、体育でなく、教育の根本的なものであり、体育の素地に教育が始めて芽生えるものである事を、日本人はもう一度よく考え直すことが必要であり、其の意味では日本教育は、もう一度書きかえられるべきであるという事になる。ドイツ、スイスの如き科学の発達した国に於て、体育が民衆の中に政治の中にどの様に採り上げられ、取り扱われているかを、具体的事例で説明された。もはやレクリエーションではない。その中にこそ、日本人の遥かに及ばない、人間、民族、政治があり一度の敗戦でガタ〳〵となる大和魂とは違うものがある。是が伝統を生む力であり、正しきに基えて発動され、最も人間的なものに基えて、築き上げられる民主々義政治の原動力であることを暗示しているものである。体操と称する特殊のものに、こだわるのでなく汎く各種の身体運動を綜合し、民族の血肉となつている姿の中に、不屈不撓、徹底研究、親和友愛、協同一致の精神が育て上げられるのでなく、育て上げられている結果を見させられたのである。考えねばならぬ事である、反省せねばならぬ事である。

（三橋体育研究所新潟県支部長、柏崎体育団副団長）

訪ねて――憧れの佐渡へ ①

紫楼生

私は佐渡へは、終戦前に幾度か訪れてはいるが、いつも新潟から両津へ、そして観光バスで、案内嬢の名調子に乗せられてザッと一巡り、再び両津へのおきまりのコースであつた。それでも「島の乙女の黒髪恋し又も行きたい佐渡ガ島」で全く佐渡は不思議な魅力を持つ島ではある。まして柏崎からの航路が開けてからは、私には未だ見ぬ小木えの関心も深く、殊にそこには特独の民踊もある由で、一度は渡つて見たいものとそれは数年来の憧れであつた。然し私の渡島の願望はただ観光を目あての呑気な旅行をやらうと云うのではない。そんな贅沢は此の貧しい家計と奉仕化に忙しい私には物心共に到底余裕はないのであるが、あの佐渡全島に育まれている傑出した民踊に就いて勉強し、社会教育の資料としたい。これが私の切なる念願であつた。而して今年こそは、今年こそはと、春以来の計画で、ようやく切り詰めた旅費を苦面し、去る九月十七日の朝七時出発、いそいそとして直江津港に向うのであつた。

九時三十分、おけさのレコードに続いて合図のドラで離港する。航路しばらくは柏崎にでも寄るのかと思われる程、米山に近づき、やがて遠ざかりゆく米山の姿を懐しみつつ甲板に立つて居たが、チラチラと沖に白波の立つ海を二百八十屯の「こしぢ丸」では、うつかりすると振り落されさうでおぢり、バタバタと顔を撫でる風も強く、又肌寒いので三等室に引込でしまつたそれでも予定航路三時間。午後〇時三十分にはあの切り立てたような白い巌壁の上に老松の茂る城山を左に見て小木町に着いた。観光景である。〽あかぬ眺めに遂乗りおくれ、次の船待つ小木港と云うところである。

附近には、矢島、経島を始め、御所桜、南仙峡その他多くの名所のある由で、何といつても風景は佐渡第一ということであるが、民踊勉強を第一に、観光には全く関心を向けない事として夕暮を迎えた。

〽小木の入江も静かに暮れて、泊り船から立つ煙。

大小幾艘かの船から炊煙を立てているのもある。新潟行きであらう白い客船も碇泊している。感慨が唯ひしひしと胸に迫る眺めである。

夜は、出張中の青木先生が帰町されて教頭先生と来訪下され、喜八屋の御主人事松井守之助先生並に小波会のナンバワン青柳辰雄氏と四人の指南で、八畳二間をぶつ通しにして猛烈な練習遂に深更一時になつてしまつた。

翌朝、更に宿の御主人には、わざ〳〵浴衣に笠を着けて模範を示され、仕上げの練習をやつて下さると云う、御厚意に衷心からの感謝を捧げて雨の中を出発、真野に向うのであつた。

ただでお習いした小木音頭は、相川音頭と同曲で踊るものであり、尚又小木おけさは、吾々が撰鉱節と聞いていた。佐渡おけさの崩しであると思われる節につけて踊るところに何か物足りなさを覚えさせられたのであつた。

柏崎高校 久しぶりの優勝

バスケットボール 上越高校新人大会

県単体連主催の上越地区高校新人バスケットボール大会は十一月二十日、柏崎市一中、柏工高、柏高の三会場で開催。地元の声援にこたえて柏崎高が優勝した昭和二十七年から三年目の栄冠であつた。なお商高は第一回戦で強豪高田商にあたり不運をかこつたが、惜しかつた。

◆男子〔一回戦〕

新井43……25柏崎農
柏崎55……30能生水産
高田商38……35柏崎商

〔二回戦〕

柏崎工49……24高田農
高田34……25新井
柏崎41……37直江津
高田商48……33糸魚川

〔準決勝〕

高田商55……46高田
柏崎41……30柏崎工

〔決勝〕

柏崎55（27……15 28……15）30高田商

◆女子〔一回戦〕

新井27……14柏崎常盤
高田北城39……17糸魚川

〔決勝〕

高田60（27……7 33……9）16新井

東西南北

◇新潟県教育委員会、柏崎市教育委員会、柏崎体育団共催の教育映画「面白い映画会」を十二月二日、三日の二日間、北鯖石小学校、田尻中学校、柏崎小学校講堂の三会場に於いて開催した。

この映画は山を愛する人達が企劃、実写したもので素人そのまゝの感覚から或いは芸術的に又健康を目的とした様々な角度から描写している、そして物語のヒロインとして演出している臨時俳優、黒田さんが直接撮影技師として来柏した。主なるフイルムは

鹿内さんと子供達
ボーナスとスキー
落葉の芸術
等　その他

昭和二十九年度全日本スキー選手権大会（赤倉会場）も同時上映した。